

語りたい！

総合診療のエビデンス??



現場で使う！ 現場で作る！

ある分野が学問領域たるための条件として、カナダの家庭医 Ian McWhinney は「特有の実践の場」、「知の体系」、「研究」、「教育」が必要と述べている¹⁾。これは、学問領域というものが、その領域に特有の実践の場・そこから作られた体系的な知・知を創り出すための研究・知を伝えるための教育からなっているということだと考えられる。これらは互いにつながっているが、本特集ではそのなかでとくに「研究」に焦点を当てる。総合診療という領域を理解するためには、その「知」の元となっている研究を理解する必要がある。そして、その領域の新たな「知」を創り出すためにも研究が必要となる。

本特集前半の「総合診療医が活躍するフィールドの最新エビデンス」では幅広い知識とそのアップデートが求められる総合診療医のために、外来・訪問診療・病棟など診療セッティング別に分けた7つの領域の近年のエビデンスを概説する。

後半の「日本発！ 総合診療医が作るエビデンス」では、日本の総合診療医が日本をフィールドとして行った研究を中心に総合診療の「知」の発展に貢献した論文を紹介する。当初は海外や国内の他領域からのエビデンスを借りることが多かった日本の総合診療も、その発展とともにさまざまな研究が行われ自身のエビデンスを提示することができるようになってきている。近年、日本における総合診療領域の研究の発展は目覚ましく、本来はここに取り上げたかったものの、紙幅の都合で取り上げられなかった多くの論文がある。本特集を読んで興味をもたれた方はぜひ、ほかの論文にも目を通すことをお勧めする。

そしてそのような特集全体の縦糸として「プライマリ・ケア研究今昔」、横糸として総合診療の研究に欠かせない他領域との連携についてのコラム：総合診療医「と」行う研究を配している。この特集を契機に日本からの総合診療のエビデンスを診療に活かす方、知を作る側に回る方がさらに増えれば望外の喜びである。

〔編集幹事〕横浜市立大学大学院 データサイエンス研究科ヘルスデータサイエンス専攻

金子 惇

参考文献

- 1) McWhinney IR: General practice as an academic discipline. Reflections after a visit to the United States. Lancet, 1 (7434): 419-423, 1966.